

地球環境問題がもめ続ける、そこに伏在する眞の流れ。——その中からを地球・世界・人類は、今後の千年の運命を選ぶことになる

新序

完全に同義ではないが、二十世紀が植民地解放の世紀だったとすれば、地球温暖化問題における先進国と途上国・~~第三世界~~との間の対立が、何百国の首脳が一堂に会したCOPとやらで徹夜で妥協案を協議しても決着付かなかったという事実は、次の世界像に何の議論も、いわんや合意のカケラも見出せなかつた、ことを意味している。

筆者は、地球温暖化問題は大海に浮かぶ氷山の小さな頭の部分に過ぎないと思う。海中の巨大な氷の本体には次の世界像の可能性がぎっしり詰まっている。その可能性についての、各國首脳の（口に出さない、あるいは未熟な）認識或いは前認識の違いをそのままにして、国際合意など出来るわけがない。このように本当は、単なる地球温暖化と言つた底の浅い問題じやないと、意外に多くの指導者（或いはそのスポンサー）は認識していて、いないのだろうか。いや、判つてゐるからこそ妥協しないのか。

元々今世紀は前世紀が結果的に領土の植民地が一掃された時代であったのに対し、**世界経済の植民性から脱却の時代**に必然的に（後述）すでに入つてゐるのだ。それは実は「植民」に纏わる諸々の深刻な問題を戦争や武力で解決できない、或いはしないとなつたときからの、必然の成り行きである。冷戦終了、超大国の出現とその変貌などは、本当は初めから判つていた。

地球温暖化の真相と真因を各國は忌憚無く指摘・主張する。今地球を覆う炭酸ガスは、確かに産業革命以来先進国が、石油などの化石燃料を篡奪して安く野放図に消費した結果の集積である。（一時は、1バーレル1ドル以下にもなつたこともあったのだ）。勿論先進国の経済発展で途上国も若干の恩恵を受けたかもしれないが、‥。

その上、戦後数十年にわたり、先進国が石油資源確保のために取つてきた手段は、戦後の紛争の真因のすべてと言っても過言ではない。「宗教の対立」と言えば、奇麗事にきこえるが、とくに或る宗教の信者の人間性にまで、大きなヒビを残しており、その修復を含め、それが人類最大の課題と成りつつある。